



明治期における小学校「裁縫科」の教材配列

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004636

明治期における小学校「裁縫科」の教材配列

田中陽子

北海道教育大学岩見沢校家庭科教室
岩見沢 068

Subject Matter Arrangement in "sewing classes" in Elementary Schools during the Meiji era

Yoko Tanaka

Home Economics Laboratory, Iwamizawa Campus.
Hokkaido University of Education

Abstract

The following subject matter characteristics were found by analyzing educational sewing textbooks used in elementary schools during the Meiji era.

- 1, There were three factors that influenced the arrangement of subject matter: the peculiarity of kimono design, clothing customs and the educational theory that simple subjects should be presented prior to complicated subjects.
- 2, Sewing subject matter was presented in steps, based on the size, design, final use and fabrics of the kimono.

1 はじめに

明治期から大正期の裁縫教育をめぐる、その教育的価値を求めて止まない姿勢は、そのころ発表された著書や論文等からも伺い知ることができる¹⁾。それらのほとんどが教授の内容や進め方に関するものである。それらの中に同種の考え方のあることや、時の経過で発展的に変化しているものがあることに気づかされる。この種の理論の展開は教授の前提となって教授の変遷に影響を及ぼしたと考えられ、その意味から、教授理論の展開は教授の変遷をとらえるための一つの手がかりになるであろうと考える。その一方で、教授の媒体として機能した教材によってもそれをとらえることが可能であろうと考える。教材の変遷には、過去から受け継がれたもの、除外されたもの、付加されたもの等があると考えられるが、その根拠となった要因を明らかにすることは必要であろう。「裁縫科」が制度上、小学校の一教科として誕生するのは明治12(1879)年に「教育令」が公布されてからのことであるが、初期においては女子の就学対策のよりどころとされていたこともあって、教材は実用主義に規定された内容であった。そのため教材には、衣服調達が目的であったかと思われるほどに多くの種類が含まれていたのであるが、その後において、教材の選択根拠や配列過程の根拠が明確になり、教材配列の順次性も形成されていったと考えられる。

本論では、明治期の小学校「裁縫科」の教材研究として、教材配列について検討する。

2 教材配列

教材配列を検討するために参考にした資料は、明治16(1883)年から明治末期までに発行された「裁縫科」に関連する教授書類である。これらの資料が発行された時期は教育制度に変化があり、初等・中等・高等小学校の時代を経て、明治19(1886)年より「小学校令」が施行されてからは、尋常・高等小学校となる。教材は第三学年では製作学習に入る前の予備過程として基礎的な技術の習得が主体となっており、第四学年からは各種の衣服製作が課せられている。

教材は「用具の種類と扱い」、「運針・各種の縫い方」、「衣服の製作」の三つに大別して検討することにした。「衣服の製作」が対象とする教授・学習内容は、名称や縫い方順序からはじまり実物縫いまでとするもので、ここでは裁ち方は除外する。というのは「裁ち方」は、明治24(1891)年に「小学校教則大綱」が出されてからは、尋常小学校での扱いは省かれることになり、衣服の縫い方を主体とする内容になるからである。「裁ち方」が除外された背景には、用布を準備することの難しさと裁つことの技術上の困難さが考慮されたものと考えられる。裁ち間違いが許されないこと、本身裁ちに至っては縫い直しや用布の寸尺不足に対応して複数の裁ち方があったことなどが教授を複雑にしたことが要因として考えられる。「縫い方」が、素縫布を用いて、縫ってはほどくことを繰り返しながら練習できたのとは対照的である。「裁ち方」を教える際に紙を接いで反物とみなし、錐形尺を用いて教える例²⁾や、裁ち方が含まれている例^{3・4)}が見られるものの、製作教材が加わるのが尋常小学校の最終学年である第4学年の第三学期であることや、縫い方の後に裁ち方が置かれている例³⁾などから、教授者の裁量にまかせることを前提にした内容であったと考えられる。「用具の種類と扱い」と「運針・各種の縫い方」はともに、裁縫に関する基礎的な知識および技術を習得させる内容である。「衣服の製作」は「用具の種類と扱い」と、「運針・各種の縫い方」を基礎とした総合学習的な意味をもつ教材として位置づけられていたと考えられる。したがって、教材配列を検討する際、これら三つを個別にみることや関連をみることも必要であると考えたからである。

(1) 「用具の種類と扱い」、「運針・各種の縫い方」

「用具の種類と扱い」及び「運針・各種の縫い方」は、基礎的な学習内容として、最初の履修学年である第三学年の教材になっている。なかでも「運針」は、その技能に熟達することが種々の裁縫技能を習得するための前提条件であると考えられていたことから、上級学年に至っても教材が新しくかわる際や、毎時間の授業の初めなどに課されていた教材である。「用具」は、教授書類では、裁縫の基本的な知識として冒頭部分、あるいはそれに近いところに記載されている。「用具」の教授上のねらいは、名称とともにその使用方法を確認させ、製作のどの段階でどのように用いるかを理解させることが要点であったと思われる。この場合多くは用具の種類ごとに使用法や選び方が箇条書きにされている。図示されている例は参考にした資料においては少ないが、用具が裁ち紙の上に無造作に並べられた例⁵⁾や、写実風に個別に描かれている例⁶⁾がある。この図の担った役割から「用具」の教授上のねらいは、名称を確認させることにあったと考えられる。一方、用具が人体とともに描かれている例⁷⁾が見られる。この場合、用い方を理解させることに重点が置かれていたと考えられる。たとえば、布の長さを測ったり標しつけにものさしを用いる場合、人体とともに描かれた図を見ることによって留意点まで確認することが可能である。布の長さを測る場合、布の耳に重ねたものさしは左端を起点に、右方向から左方向にずらしながら測っていくことが理解できる。またへらつけに用いる際は、左手でものさしを固定させた上でものさしの刃を使ってへらつけをすることが理解できる。「用具」の教授上のねらいのもう一つの側面として、裁縫に有用かつ欠かせない用具についての理解は、裁縫に対する動機づけに機能したと考えられる。それは、裁縫用具の名称や使用法を教えながら、裁縫を自己の天職で

あるという喜びと認識を深めさせようと考えられていたほどである⁸⁾。

縫い方やくけ方などの「各種の縫い方」の練習は、運針練習と同じく素縫布と呼ばれた練習用布を用いたり、簡単な小物類の製作を通して練習させている。例えば小物類の製作はなく、素縫布で練習するだけであるが^{9)・10)}、素縫布で練習した後、小物類の実物縫いが課されている例^{11)・12)・13)}や、別布での練習はなく実物の製作を通して各種の縫い方を習得させようとする例^{14)・15)}も見られる。小物類の製作に選ばれたのは、雑巾、ぬか袋、紐、単前掛、風呂敷などの実用品である。素縫布は運針用布ともいわれ、用具に加えられている^{16)・17)・18)・19)}。このことは、裁縫の学習に際しては常に携帯する物であったことを意味しており、使用する頻度もそれだけ高かったことを暗示している。素縫布に用いられた材料は資料により異なるが、縞柄の木綿か白木綿が一般的だったようである。縞柄が取り上げられたのは、縞柄を縫い目線に見立ててその上をたどることで直線縫いに慣れさせようとした配慮があったと思われる。大きさは並幅で二尺五寸から三尺で、2枚から3枚必要とされた。運針練習は、速さを養うことを主目的とされた「素縫い」と縫い目の正確さを養うことを目的とされた「直線縫い」に区別して課された²⁰⁾が、学習過程としてはこの他、素縫布を一枚で練習する段階から、二枚の段階へと進展する例もみられる²¹⁾。また、衣服の部分縫いに入ってからこの素縫布は用いられたゆえ、「運針」や「各種の縫い方」、さらには衣服の部分縫いの内容を配慮した練習用布であったといえる。

(2) 「衣服の製作」

「衣服の製作」に関わる教材とその配列について述べる。服種でみると、襦袢、単衣、裕、綿入、羽織は参考にした資料の全てに含まれている教材である。その他、股引、足袋、袴などがみられる。これらの服種が選ばれた背景には、裁縫科で扱う教材は日常生活によく用いられるものであることが制度上、規定されていたことがある²²⁾。これらの服種の一つ身から本身裁ちまでが含まれている。

教材は、「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」によって段階的に配列されている。

「大きさ」に因る配列は、一つ身から三つ身、四つ身、本身へと小さいものから大きいものへと連絡していく。大きくなることによって、例えば襦袢では背縫いが、単衣では背縫い、腰揚げ、袂丸が加わる。たとえば本身女物単衣について、「一つ身や四つ身とちがうのは、おもに寸法で仕方は肩当と尻当とのあるのと袂を丸くする位のこととちがうのであります²³⁾」と述べられているように、大きくなることによる教授への影響については、それほど重視されていなかったと思われる。

「服種」に因る配列はまず襦袢、続いて単衣、裕、綿入れ、羽織の順に展開するかたちが基本型であったと考えられる。その他、帯・袴・小児改良前掛・足袋・頭巾などが参考にした資料において見られる。襦袢から始まった理由として、第一に下着であることから材料を選ばなくても良かったことが考えられる。たとえば、節約利用の目的で古着を用いたり、袖に別布を用いたりすることがあった。第二にはおくみがなく、教材の中では最も簡単な構成であることである。第三に、男女の区別がないことが良かったと考えられる。単衣・裕・綿入れは長着形式のきもので、これら三種のきものは季節の変化に対応して更衣された。その季節になればなくてはならない基本的な服種であった。しかも貧しさが生み出した合理性というのであろうか、単衣に裏をつけて裕とし、その間に綿をはさんで綿入れとしたように、くり回して着用していたことから、そのための縫い直しは年中の重要な仕事であった。ゆえに、単衣・裕・綿入れは夏から秋、そして冬へと季節の移り変わりに準ずる配列にされたと考えられる。羽織は長着の外側に着用される衣服であるから、全体として下着、長着、上着の順に展開していたといえる。その結果、単衣、裕、綿入れへと対象とする衣服が一枚から二枚・三枚へと材質の異なる材料を重ねたり綴じ合わせたりするなどの作業が伴うものへと展開する。本身でみた場合、襦袢から単衣へと展開する過程で、肩当て・居敷き当て、腰揚げ、袂丸、おくみ付け

が新たに加わる。さらに単衣から袷にすすんだ場合も、中綴じ、丈調べ、裾芯入れ、裾綴じなどが加わる。

「性別」に因る配列は、単衣以後の教材において男物・女物の両方が加わることになる。性別による技術上の差異は単衣では男物の腰揚げと人形袖、女物の振り、そして袷では男物の肩揚げと女物の胴はぎがあげられる。男物の袷を製作する場合、既に男物の単衣や女物の袷等で習得した技術を復習する形で実習することになる。このように、教材が展開する過程で作業上の手間が増えたり、新しい技術が必要になるなど、学習上、困難さが加わることになる。

「材料」に因る配列は、綿と絹が特定されている例^{24)・25)}が見られる。袷や綿入れは綿で製作した後、絹で再度製作するという教授細目になっている。綿布は丈夫で安価であるなど日常着に適用する材質であることから、ほとんど綿布を扱っていたと考えられる。また、需要面から要求度の高い衣服が低学年の教材として配列されていると考えられる。

3 教材が段階配列された要因

「衣服の製作」に関する教材が「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」によって段階的に配列された要因について検討する。

(1) 着物の被服構成上の特長による影響

まず、「衣服の製作」に関する教材において段階配列を可能にした要因を、着物の被服構成上の特長に求めて考察したい。着物は形、名称、縫い方、裁ち方などにおいて「大きさ」や「服種」や「性別」による差異がわずかに見られるだけで、大体において共通点や類似点が多い。したがって、服種の配列を襦袢－単衣－袷－綿入れ、また子供用から大人用へと段階的に配列したことは、児童の学習上反復する内容が多かったことを意味している。これらのことは、着物の被服構成上の特長に起因しているといえる。着物において意匠の場は、染め、織り、文様などのテキスタイルに限定され、形はほぼ一定した。それはきものが一反の織物から作られ、織幅や織丈などに一定のきまりがあったために形に変化を求められなかったという背景がある。定型的な形であるという特徴は、裁縫教育の内容にも影響したと考えられる。つまり着物の特性のうち、「裁縫科」が教育の対象にしたのは定型的な形であり、その形を完成するために必要な技能の習熟を教育内容とした。そのための教授・学習過程は、裁縫技術の違いを規定している「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」を基準として段階的に仕組まれたものと考えられる。

(2) 教授理論による影響

次に、教授理論や法令によって検討する。明治期において裁縫科の教授法の確立に貢献のあった錦織は教授について、「或る知識・技能を、児童の心身の発達に応じて、知的の方面を根拠として、これに情的の活動を連結して、以て興味を振起せしむる方法なれば、既知より未知に、易より難に、単一より複雑に、名称より性状に、全体より各部に、各部より総体に及ぼすべき順序に、従うべきことなれども²⁶⁾」と述べている。北海道教育会編纂の『裁縫教授書』においては、「教授の順序は、女兒の眼及び手指の発達に伴ひ、他学科の如く易きより難きに入り、既知より未知に進むの方法によるべし、故に初めには女兒の家庭にて、常に見聞する処の裁縫用具の名称使用法より、次第に運針各種の縫ひ方、衣服の部分縫等を授け、漸々各種衣服の裁ち縫ひに及ぼすべし²⁷⁾」と記されている。

これら教授書類に記されている教材配列の基準と「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」との関連を考察する。各教材の教授および学習は、名称や縫い方順序を確認した後に、各種の縫い方や部分縫いを練習し、実物縫いへと発展するかたちが基本的であったと判断される。教材の移行にともなって縫合する箇所が増えた

り、未習得の技術が必要になるのであるが、教授および学習をより複雑にすることにもなった。それは易しい内容から難しい内容への発展でもあった。それへの対応として、教材を段階的に配列することによって既知事項を反復させ、未知事項については部分縫いなどを課した。そうすることによって学習者の抵抗感を少なくし、技能の習熟と定着をはかろうとしていたことが考えられる。名称によって全体を観察させて教材を直観的にとらえさせ、その後の製作過程において徐々に概念が形成されることがめざされていたと考えられる。名称はその後の教授・学習過程において常に用いられる用語であり、形状や構成までも連想させるキーワードとなる点から、定型的な形を完成するための技能の習熟が目指されていた「裁縫科」では、重要な要素を有した基礎学習であったと考えられる。明治期の教授理論に多大な影響を及ぼしたとされるヘルバルトの教授理論は、「興味」の概念を中核概念としていたが、興味は既有的知識を保持し、その拡大を求める精神的活動として機能するものであるととらえられていた。技能教科においては、「興味」を喚起させる方法として反復練習による技能の熟練が必要であるとの指摘も見られる²⁹⁾。錦織が述べているように、「既知より未知に」、「易より難に」、「単一より複雑に」、「名称より性状に」、「全体より各部に」、「各部より総体に」という配列の根拠は「興味」の概念を教授の中核に位置づけていたことによると考えられる。

(3) 家政における衣服管理の影響

家政担当者としての女性を育成することが目指された「裁縫科」の教育的側面として、日常の衣服管理の影響が教材にも及んだと考えられる。「畳む」ことや「解く」ことは衣服管理上必須の仕事である。「畳む」ことは、平面構成の着物においては合理的な管理方法である。「解く」ことは、洗濯や季節の移り変わりに更衣で対応した衣生活に機能する技術であった。和裁においては、「縫い」は永久的なものではなく一時的な技術であり、解いて無にすることは厭われるべきこととは考えられていなかったように思われる。次の季節が来れば容易に解いて単衣や袷や綿入れ等に仕立て直したのである。解いて縫い直すことを前提とする考え方は、縫い代の始末にも表れた。余分な縫い代は切り落とさずに縫い込むのは被服構成上の特長であり、これは芯にするという機能面の他に仕立て直しに対応するための経済面の要因があった。単衣―袷―綿入れへと展開する教材配列には、季節の変化に対応して繰り返し着用した衣生活習慣による影響が大きいと考えられる。

4 ま と め

明治期の小学校の「裁縫科」における教材配列は、「用具の種類と扱い」・「運針・各種の縫い方」に関する基礎的な学習内容をもつ教材が初学年に配置されるのに続いて各種の「衣服の製作」が配列されていた。「衣服の製作」に関する教材は、「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」を基準に段階的に配列されていた。段階的に配列されていた要因については、着物の被服構成上の特長・教授理論・衣服管理の影響があったと考え、その観点より検討した。着物は定型的な形をもつことが被服構成上の特長であるが、技術上の違いを規定している「大きさ」・「服種」・「性別」・「材料」を基準として段階的に配列された。教授理論においては、「興味」の概念を中核概念としていたヘルバルト教授理論の影響を受け、「既知より未知に」、「易より難に」、「単一より複雑に」等を基準とする教材配列の影響を受けていた。解いて縫い直すことが前提であった着物の被服構成は、季節の変化に対応して繰り返し着用した衣生活習慣による影響があった。

引 用 文 献

- 1) ・木下竹次, 此の如くにして裁縫教授の革新は出来る, 家事研究, 1 (1), (1920) 45-48, 1 (2), (1920) 35-45
 ・水田みつ, 初等教育に於ける裁縫科につきて, 教育研究, 4 6, (1908) 63-66
 ・東京高等師範学校附属小学校研究部, 現代教育の欠陥に対する救済方法案 裁縫科に就いて, 教育研究, 1 2 2, (1914) 110-112
- 2) 北海道教育会, 裁縫教授書 卷一, 富山房(1900), 25
- 3) 波佐谷美智子・松島華子, 小学裁縫教授書 上, 三穂堂(1895), 目次
- 4) 佐藤小寅, 改訂小学校裁縫教授書 尋常科科用, 松雪堂(1899), 目次
- 5) 村たか, 生徒用裁縫書 全, 權山堂(1890), 1
- 6) 北海道教育会, 裁縫教授書 卷一, 富山房(1900), 9-12
- 7) 戸澤可寿子, 小学裁縫教科書 女児用甲種, 金港堂(1902), 10
- 8) 水田みつ, 初等教育に於ける裁縫科につきて, 教育研究, 4 6, (1908)63
- 9) 前掲書 5)
- 10) 大村・波多野・柴田, 尋常小学校裁縫書 児童用, 普及舎(1902),
- 11) 前掲書 3), 目次
- 12) 前掲書 4), 2-3
- 13) 戸澤可寿子, 小学裁縫教科書 教員用, 金港堂(1902), 1
- 14) 玉木一, 小学裁縫書, 教育書房(1883), 3-4
- 15) 錦織竹香, 最新小学校裁縫教授法, 実文館(1908), 38-40
- 16) 前掲書 5), 1
- 17) 前掲書 10)
- 18) 前掲書 4)
- 19) 前掲書 2), 9
- 20) 拙著, 明治期における小学校の和裁教育—教授書・教科書よりみた内容および方法—, 家庭科教育学会誌 投稿中
- 21) 戸澤可寿子, 小学裁縫教科書 教員用, 金港堂(1902), 11
- 22) 教育史編纂会, 明治以降教育制度発達史, 2, 教育資料調査会(1938), 256
- 23) 大村・波多野・柴田, 高等小学校裁縫書 児童用二, 普及舎(1902), 18
- 24) 前掲書 14), 目次
- 25) 岩田照・中村真, 普通小学裁縫科書 中等科, 正文堂(1884), 1-20
- 26) 前掲書 15), 12-13
- 27) 前掲書 2), 4
- 28) 馬淵冷佑, 興味と教授に就いて, 教育研究, 4 6, (1908)9
- 29) 教育史編纂会, 明治以降教育制度発達史, 3, 教育資料調査会(1938), 95